



耳原総合病院 第3回QMS大会

総合病院のQMS活動に 今後も期待します



医療サービスの品質向上 安全管理文化の醸成へ

1月30日、第3回目となるQMS大会が総合病院のみみはらホールで開催されました。

今年度は、25部署のQMSメンバーが「入院患者さんの転倒を防止するためにどんな工夫ができるか」や「外来の長い待ち時間について、ごついたら患者さんの苦痛を軽減できるか」など、7つのテーマ別に日頃感じている課題を洗い出し、約1年かけて改善策の立案↓対策の実施↓結果の評価↓とPDCAサイクルを回しました。部署も職種もキャリアも異なるメンバーでチームを結成し、部門横断的に活動するのが、当院の小集団活動の特徴です。

大会には、職責者を含む50人近くの見学者が来場し、各チームの発表を熱心に聞き入っていました。また、大会終了後のアンケートでは、「日々の業務に直接関わ



ることでも)初めて知って驚いた」と活動内容や成果に感じしたり、「今回の活動を踏まえて、別の課題にも展開して欲しい」と次年度の活動に期待したりするようなコメントが数多く寄せられ、QMS活動への関心の高さも伺えました。

私たちはこのQMS活動を継続することによって、先行的な医療の安全・品質管理の文化を醸成し、さらなる安全・安心・信頼の医療提供の実現を図っていきます。

中田 直子

(耳原総合病院 品質管理部)

※QMSとは、Quality Management Systemの略で、医療サービスの品質向上を目的とした、先行的な改善活動の仕組みを意味します。総合病院では、院内各部署の医療安全推進担当者を「QMSメンバー」と呼び、このQMS活動に取り組んでいます。

花粉症について

花粉が飛び始める2月頃から、くしゃみ、鼻水、鼻詰まり、目の痒みなどの症状が出る状態を一般には花粉症と呼びます。

花粉が目や鼻から入ってきて、体内の免疫システムに引っかかり敵とみなされると、花粉に対する抗体が作られます。この抗体が一定量を超えると、特定の細胞からヒスタミンという物質が大量に放出され、花粉症の症状を起します。ただし、花粉が免疫システムに反応するかどうかや、抗体が作られる量については個人差があるので、症状が出る出ない、出ても症状に程度の差があるということになります。

花粉にもいろいろな種類があるので、どの花粉に反応しているかは、血液検査や皮膚反応検査等で調べます。

症状に対する対症療法としては、抗ヒスタミン剤でヒスタミンの働きを抑えて、症状を弱める方法がある。



ります。薬局等で販売している花粉症の薬の主流で、以前は眠くなるという副作用がありました。最近の薬はかなり改善されています。抗アレルギー剤もよく使われますが、症状の出る少し前から飲み始めると、よく効くようです。局所の症状が強い場合には、鼻や目に直接使用する点鼻薬・点眼薬もあります。

花粉症そのものを治していく治療法として、免疫療法(脱感作療法)があります。原因になっている薄めた花粉エキスを注射したり、飲み込んで、体質改善を図るというものです。

毎年、花粉症に悩まされているという方は、耳鼻科等の医療機関でご相談されるのも良いかもしれません。

シリーズ⑧

(耳原総合病院小児科 藤井 建一)

